

北村厚著『教養のグローバル・ヒストリー：大人のための世界史入門』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）

遠山，隆淑
熊本高等専門学校共通教育科：准教授

<https://doi.org/10.15017/2230971>

出版情報：政治研究. 66, pp.97-104, 2019-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

書評

北村厚著『教養のグローバル・ヒストリー——大人のための世界史入門——』

(ミネルヴァ書房、二〇一八年)

遠山隆淑

高校世界史教科書の今

「高校の世界史で習うのと違い、最新の研究では〇〇が定説だ」といった話を耳にした経験はないだろうか。だが、この手の話は、適当に聞き流した方がよいかもしれない。本書の著者も言うように、現在の教科書には、「ほんとうにこの内容を高校生に教えるのも大丈夫なのだろうか」と心配になるくらい、最新の歴史学の研究成果がおりこまれ(三三三頁。以下、本書からの引用は頁数だけを記す)ているからである。

本書の第一の特色は、現在は大学で近現代ドイツ史を研究する著者が、高校で教鞭をとる中で出会った教科書のバージョンアップに対する驚きから生み出された書物だ、ということにある。一例として、本書の冒頭では、「大航海時代」が

検討されている。ヨーロッパ中心史観に基づくこの見方は、現在の一部教科書では採用されない。それどころか、教科書の一つには、次のような明確な指摘すらある。

「南シナ海、インド洋の交易が大きく発展した一五世紀から一七世紀にかけては、……ヨーロッパ人の活動に重点を置いて、「地理上の発見」あるいは「大航海時代」とよばれていた。しかし、この時代の国際交易の発展は、ヨーロッパ人渡来以前に準備されていたアジアの航海者のネットワークを基礎としている。この時代のアジア域内の流通を担ったのは、ダウ船やジャンク船、また朱印船に乗ったアジアの航海者たちであった。この時代を、世界の交易規模が大拡大した時代として、「大交易時代」とよぶ」(東京書籍『世界史B』二〇〇)。

本書で展開される「グローバル・ヒストリー」は、こうした教科書のバージョンアップの成果を踏まえたものである。

本書も近年の教科書も、ヨーロッパ中心史観からの脱却を重要課題としているが、ヨーロッパ史自体の記述も大きく変化している。たとえば、「ルネサンス」は、東京書籍も山川出版社の『新世界史B』でも、ベスト禍や飢饉が頻発し、「死」に向き合うことから生じた運動として中世の末期に位置づけられる。また、「絶対王政」は、「国王が絶対的な権力をふるえたわけではなく、「ギルドや貴族」、「都市や農村」などの

中間団体を通じて「統制したにすぎなかった」（同前書二五一）。このように、教科書の内容は毎年のようにバージョンアップされており、自身の専門ではない分野については、現役の大学生や高校生の方が新しい知識を身に着けているのかもしれない、と考えてみる価値も十分にあるほどである。

「グローバル・ヒストリー」の試み——「ネットワーク」という視点

本書の第二の特色であり主題でもある「グローバル・ヒストリー」に目を転じよう。「幅広い情報を網羅的に記載しなければならぬ」（iv）以上、各国史や東アジアなどの地域史が中心になることは、教科書の宿命である。その欠点を解消すべく、本書は高校世界史の教科書群を素材に、「グローバル・ヒストリー」を描き出そうとする。

「この本の主役は、……大帝国や英雄たちではない。……主役は異なる地域や文化をつなぐネットワークの歴史そのものである。ネットワークをつなぐのは、大草原を騎馬で駆ける遊牧民たち、航海術を駆使して大洋を越える海洋民たち、隊商を組んで砂漠を越えるオアシス商人たちである。彼らによって世界がダイナミックに結び付けられていく」（v）。

人々の移動によって成立する「ネットワーク」を主役に、本書は古代文明期から一九世紀までを駆け抜け、地球を俯瞰的に結びつけていく。以下、本書が論じるすべての時代で対象とされる「ユーラシア・ネットワーク」に注目して、評者なりに大要を示してみたい。

ネットワークの形成——一四世紀（第六章まで）

陶磁器や銀のような様々なモノや製紙法などの技術、ギリシア哲学などの学問や文化を媒介とした人と人とのネットワークの中で、「グローバル・ヒストリー」を形成するそれとして追跡されるのは、ユーラシア大陸の東西を結ぶ三つのネットワーク、大陸北部の「草原の道」、中央アジアの砂漠を越える「オアシスの道」、そして最東端は琉球に始まり、インド洋を通じてアラビア半島へと至る「海の道」である。

紀元前一千年紀までは、人々の局所的な移動はあったものの、「世界の屋根」や砂漠、航海技術の未発達から世界は分節的であった。しかし、カナート建設技術の確立を通じ、紀元前一千年紀には、ソグド人によって「オアシスの道」がつかざる。同じころ、騎乗技術の発達により、スキタイが中心となって、ユーラシア北方の「草原の道」も生まれた。「海の道」

は少し遅れるが、二世紀にモンズーン航海技術の発達（「ヒッパロスの風」の発見）が、アラビア海を經由してローマ帝国とクシャーナ朝とを結んだ。東南アジアの交易で繁栄していた扶南など多くの港市国家が、このルートの世界有数の大市場の中国（漢帝国）に結びつける。風や馬、水やラクダが、散在していた世界の人々を、まるでシナプスが結合されていくかのようにつなげていった。

ネットワークは、一度形成されると結びつきを強めていく一方だったわけではない。気象条件の激変による遊牧民の移動にはじまる「三世紀の危機」や人口急増下での寒冷化ももたらした「一四世紀の危機」における、ネットワークの緊密化ゆえの、ペストの伝播などによって、人々の移動やコミュニケーションは活発になり、または停滞した。

興味深いのは、その変化における陸路と海路の違いである。「草原の道」も「オアシスの道」もともに政治勢力の保護を必要とするため、唐などの安定期には活況を呈する。逆に「海の道」は「自由」のネットワークであり、商人たちが海を航行して交易を行うには、政治的な統制はむしろ障害要因であった。それよりも、たとえば宋への朝貢を拒否した後に栄えた日宋交易や元寇後の日元交易における博多商人のように、あるいはジャンク船を繰り出した中国商人やダウ船でイ

ンド洋へ乗り出したムスリム商人のように、「海の道」は点在する都市を拠点にそれらをつなげる民間交易により繁栄した。モンゴル帝国がユーラシア大陸を席卷した一三世紀にも、「海の道」は繁栄期を迎えた。「自由な海」を求める東南アジア諸国の反発が、海のネットワークの征服も狙ったフビライの態度を軟化させ、交易ネットワークが緊密化したためであった。こうして一三世紀には、「海の道」と「陸の道」とがつながり、「第一次大交易時代」とも言われる繁栄期を迎えた。

ただし、陸の道も交易の主体は国家ではない。交易は、ソグド人や、後にはたとえばチンギス・ハンが緊密化したウイグル商人により行われ、いくつもの国家の興亡の下、彼らはその主役であり続けた。ソグド語やソグド文字、ウイグル語やウイグル文字は、交易に不可欠の国際商業語や文字となり、チンギスはウイグル文字をもとにモンゴル文字を定めた。

大交易時代とグローバル・ヒストリーの出現——二五世紀〜一七世紀（第七章から第九章）

一三世紀にユーラシア大陸と海とを円環的に結んで活性化した交易は、「一四世紀の危機」で停滞し、元の衰退もあって

混乱した。そうした中、明が朝貢体制の確立を通じネットワークの再生を図る。有名な鄭和の南海大遠征も、永楽帝による海洋ネットワークの把握の試みによるものであった。その結果、従前は「自由の海」の上に成立していた海洋ネットワークもまた、大帝国の管理下に置かれ、安定を取り戻した海洋ネットワークを舞台として、「大交易時代」が始まる。

しかし、朝貢は明にとって高くつきすぎた。権威を保つために、貢物よりも多くの下賜品を必要としたためである。次第に朝貢の回数が制限される。そうした中、明は交易の維持のため、琉球とマラッカを中継点として保護した。これら交易中継国は、明などの後ろ盾を得ながら「自由な海の結節点として」繁栄した。「大交易時代」とは、「どこが覇権をにぎるといっているのではない。海の国際化・多様化・脱中心化の時代」だったのである（一三七）。

東アジアの繁栄は、西方にも波及した。すでに一世紀の十字軍派遣によって「アジアの富」の「魅力と利益にとりつかれ」（七七）、ユーラシア・ネットワークにはじめて組み込まれていたヨーロッパも、東方貿易を通じてより緊密な接続を試みた。しかし、オスマン帝国のコンスタンティノープル占領によりルートは絶たれ、ネットワークから切断される。

この切断が、逆説的に「世界の一体化」を生み出すことに

なる。イスラーム世界を経由しない東アジアとの再接続の試みとして、「新航路」が開拓されたのである。その結果、大西洋経由でインドへと至るルートと喜望峰を回るルートが新たに加わり、「真の意味でのグローバル・ネットワーク」が成立して、「世界の一体化がはじまった」（一四五）。

本書で描かれるグローバル・ヒストリーが重視するのは、一五世紀に本格的に本書に登場するヨーロッパの位置づけである。「新大陸の発見」が西洋中心史観に基づく見方にすぎないという理解が広まって久しいが、本書ではこの視点が「世界史」規模で展開される。本書の主な舞台は、ユーラシア大陸とその東西を結ぶ海洋であり、アジアである。そのため、ヨーロッパの人々の動きもそこ（を中心とするネットワーク）から眺望される。地理的な視点だけではない。ネットワークは、交易のそれである。つまり、実力装置を備える国家主体の営みではなく、実力なき商人たちの交際である。本書は、こうした地点から一五世紀以降のヨーロッパ人の動きを見て、たとえばポルトガルのインドルート支配が示すように、長きに亘り各地域に散在していた港市国家などの点のネットワークを、暴力的・独占的・全体的に支配して「海洋帝国」を築く異質な「自由な海への乱入者」（一四四）と捉える。

ヨーロッパは、アジアの繁栄が生み出した大交易時代の新

規参入者となった。彼らはそこで、絹織物や陶磁器（中国）、香辛料（東南アジア、インド）、宝石類（インド）を買い求め、たとえばポトシ銀山で採掘された銀を支払った。すなわち、価値ある人工物を作り出すアジアと、先を争って金を払いそれらを購入する、あるいは暴力的に奪い取るヨーロッパという交易関係や対比が、本書では提示されている。

ただし、グローバル・ネットワークの成立という観点からは、ヨーロッパの海洋進出の決定的な重要性を見逃すことはできない。新大陸における銀の採掘が「銀のグローバル・ネットワーク」（二六六）を生み、大交易時代を活性化させたのである。ここで日本が重要なアクターとして登場する。戦国大名の領国経営で採掘が進んだ日本銀も、当時のグローバル経済で中心的な役割を果たす。タタールとの戦争での不足を補うために明で大量に必要とされた銀が、倭寇やポルトガル——スペインのように銀の供給源を持たない——を通じて、北部九州から大陸に輸出された。その交易の過程でルートを外れたポルトガル船が種子島に漂着する。北部九州を中心とする大名たちとポルトガルとの、本格的な南蛮貿易の開始である。交易による莫大な利益を求めた戦国大名たちのキリスト教への改宗も進む。ポルトガルは、日本で得た銀を支払って中国産品を買った。こうして、一六世紀の北部九州は、「極

東にキリスト教世界をつくりだし、ポルトガル・ネットワークに組みこまれ」「まさにグローバル・ネットワークの縮図ともいべき特異な文化的空間を生み出していた」（二六〇）。

しかし、大交易時代は一七世紀に終焉した。後世、日本の「鎖国」と「いわれる」（一九九）海禁政策が第一の原因である。徳川政権は朱印船を繰り出して海外進出を図ったが、キリスト教と一揆の結合を恐れた政権によって、対外交渉は「四つの口」（出島におけるオランダとの交易、対馬経由での朝鮮との交易、薩摩と琉球経由での中国との交易、松前藩を通じたアイヌとの交易）に制限された。中国でも、清への王朝の交替で生じた大混乱による海洋の無秩序化および鄭氏台湾と清との対立の中で、康熙帝により海禁政策（遷界令）がとられる。その結果、「東アジアの海外ネットワークから日本と中国という二大商業地域が離脱」、日本銀の世界的な流通量も減少して、大交易時代が幕を閉じた（二〇五）。

グローバル・ネットワークにおける東アジアのプレゼンスは急速に低下し、重心はインドと環大西洋とに移る。一七世紀前半、オランダ（東インド会社）はアンボyna事件などの実力行使を通じて、海洋進出のライバル国イギリスとの争いで優位に立った。しかし、キャラコの交易をめぐるインドや北米植民地における抗争で敗北（英蘭戦争）した後、名誉革

命で同君連合が成立して、覇権争いは英仏に移った。

東西関係の変化と帝国の形成——一八世紀～一九世紀 (第一〇章から第二二章)

ただし、グローバル・ヒストリー全体として見れば、一八世紀は「ヨーロッパの成長とアジアの成熟がかさなり、両者が文化的に交流する幸福な時代」であった(二二一)。たとえば、オスマン帝国では、西洋風の「チューリップ文化」が文字通り花開き、オスマン帝国からコーヒーを輸入したフランスでは、カフェ文化が栄えた。さらに、対外的平和を迎え、一八世紀の間に人口が三億人へと三倍増するほどの「盛世」に入った清では管理貿易体制が進み、物産品がヨーロッパの上流階級の憧れの的となった(「シノワズリ」)。中国への憧れは、その文化や歴史、制度に対する強い関心となってヴォルテールら啓蒙的知識人の探求心を刺激した。日本も、「鎖国」の中で様々な技術の国産化に成功し、人口が増加した。ヨーロッパ人は、アジアの「社会を自分たちと対等な、優れた文化をもった地域として尊重」しており、幸福な文化的交流が成立していた(二三〇)。

東西のこのような共存は、西洋の内部変化により変容する。

英仏の世界規模での対立は、重税となって北米一三植民地を圧迫する。結果、独立戦争が勃発したが、そこで広まりを見せた普遍的な人権思想が逆輸入されフランス革命を引き起こし、再びハイチへと輸出される。この一連の「環大西洋革命」の中で「近代の理念」が確立する。大西洋では合衆国の独立を許したイギリスだったが、インド支配をめぐる英仏間の争いには勝利した。しかし、インド産綿布の輸入で国内の貴金屬は流出する一方であった。ここから、「輸入代替としての産業革命」が始まったのである。

生産力が急増した「世界の工場」イギリスは、労働者の「カローリー」撰取のためもあつて流行したミルクティーの茶葉を求めて、中印間の海洋ネットワークの構築を進めながら、清に自由貿易を要求した。「伝統的なアジア国際秩序にこだわ」った清に対し、「産業革命」を成功させ、「生産力や軍事力において中国にもわたりあえる」という「自信」を得たイギリスは、「アジアの停滞性への疑義」を抱くようになる。東西の「地位は逆転」して、アジアは「近代」化のための「啓蒙」の対象となった(二三八―四〇)。

一九世紀には「西洋の衝撃」によって、イギリスが中心となり、アジアの「鎖国」は「こじあけられ」る(二四一)。同国は、フランス革命軍の占領により崩壊したオランダの海洋

ネットワークを継承しながら海洋帝国を成立させ、東アジアへの進出を強めた。自国製の綿布の輸出が進み対インド輸出超過になった同国は、一〇年代末にはじめて対アジア貿易で黒字となったが、対中貿易では赤字が続ぎ、インド支配を強化してアジアのネットワークを固めつつ自由貿易への圧力を増していく。しかし、中国の門戸は固く、貿易赤字を補填するため、アヘン密貿易という「非人道的な禁止手を臆面もなく導入して」「対アジア貿易の総体的な黒字」を達成した(二五九)。これがアヘン戦争に帰結して、対東アジアの不平等条約体制が、トルコなどイスラーム諸国との不平等体制に続き形成されていく。米仏など列強が後を追ひ、対中貿易の中心地として期待を集めた日本に黒船が来航する。「不平等なネットワーク」が、東西間に構築されていったのである。

しかし、清や日本、タイは、この「衝撃」から近代化へ向けて舵を切ることで、一九世紀後半の間に「近代アジア間貿易ネットワーク」を、華僑などの活動を通じて急速に形成して西洋列強に対抗していく。イスラーム世界も、「パン・イスラーム主義」に基づき近代イスラーム・ネットワークを形成して列強とはげしい闘争を繰り広げた。西洋列強の先頭を行くイギリスは、七三年の大不況後、第二次産業革命への対応に後れをとり、「世界の工場」の地位から転落したものの、金

融業を主軸とした「世界の銀行」への転身に活路を見いだした。しかし、その資金確保のためにインドに対する貿易依存度を高め、直接的な領土支配を強化して帝国化を進めた。その他の列強も同様に、アフリカを中心に植民地支配を広げ、世界はネットワーク間の競争から帝国による分割へと変容していった。こうして、二〇世紀を迎えることとなる。

国家を中心とするこうした動きの下、一九世紀には人々の移動の様子が劇的に変化した。蒸気機関車などによるスピード化を中心とした、交通革命による移動手段の変化が主要因である。電信技術の確立により情報の伝達にも激変が生じた。この変化と人々のグローバルな規模での移動は、コインの裏表の関係にある。交通革命は、人々の大量輸送を可能にして、一九世紀は合衆国に見られるような移民の時代ともなった。その移民の力が、北米大陸の東西から鉄の道のネットワークをつなぎ、さらなる移動の迅速化、大規模化をもたらした。シベリア鉄道やスエズ、パナマ両運河も開通した。一六世紀に生まれた「世界の一体化」は、ここに完成した。

「グローバル・ヒストリー」の役目

以上、イスラーム・ネットワークやモンゴル帝国、ロシア

の動向、奴隷貿易や三角貿易など多くの情報を割愛せざるをえなかったが、本書の概要を評者なりにまとめてみた。教科書のバージョンアップにもかかわらず、たとえば評者が専門とする政治思想史関連について言えば、「産業革命」や「幕府」という用語法など最新とは言えない点を指摘することはできる。しかし、グローバルな視点が重視されている現在の教科書の様子は伝わったのではないだろうか。それら膨大な素材が、著者の構成員によって「グローバル・ヒストリー」という視点から再構成されたのが、本書である。

あえて難点を挙げるとすれば、ヨーロッパ登場後の近代の歴史は、西洋、特にイギリスとその他地域との関係の記述が中心になってしまったのではないか。大交易時代までに展開されたような俯瞰的な「脱中心」的視点を、一七世紀以降にも貫き通すことはやはり困難なのだろうか。

もう一点指摘しておきたい。本書は、モノを媒介にした地球規模における「ネットワーク」の歴史書である。全体を俯瞰しながら細部に目をやると、素朴な愚王観のように、歴史的な失敗を安易に個人の責任に帰すことの難しさがわかる。しかし他方で、著者も認識しているように、世界史の学習は本書だけで済ませられるものではない。「人間」が後景に退くグローバル・ヒストリーでは、ネットワークが自動的な運

動を展開するかのような印象を読み手に与えるが、状況規定的ではありながらも、歴史を動かすのは人間だからである。歴史学は人間の「探求」の成果であって、「グローバル・ヒストリー」という額縁の設定自体、人為によるものである。本書では、グローバル・ヒストリーにおける「大きな変化のただなかにある現代だからこそ必要な教養」の重要性が述べられているがそれはどのような「教養」なのか。グローバル化のひずみに対する反発から、「一国中心的なものを見据えた上持」(v)されることに對する解毒剤となることを見据えた上で、グローバルなネットワークを俯瞰することが、歴史を探究する者にどのような「教養」をもたらすのか。評者の力量では、本書からそれを読み取ることはできなかった。

しかし、これは、各読者が答えを探求すべき問いであろう。著者も明言するように、なによりも「歴史はおもしろい」(iv)。評者も高校生の頃、二〇世紀初頭の国家間関係などを心躍らながら自ら図示して学んだが、本書によって学習者は、「つながり」の視点から、世界史を学ぶツールを得た。従来は各国や各地域の通史を中心とした、いわば縦糸だけで組まれていた教科書に丁寧な横糸を通して、ほつれない世界史の織物を見せてくれた著作として、本書の登場は非常に意義深い。